



戦争のニュースがなくなりません。海外では子どもをふくむ多くの人がたがぎせいになっています。かつて日本も市民をまきこんだ戦争をしていました。そして79年前の7月4日、高知市はアメリカ(米)軍の激しいこうげきによって焼け野原になりました。「高知大空襲」です。16さいだった佐川町の久川千代子さん(95)は、きせき的に生きのび、語り部の活動を続けています。久川さんがかいた絵とともに、その体験をしようかします。

高知大空襲 平和願い 伝え続ける



語り部の
久川さん(95)

アメリカ(米)軍による高知への空襲は、1945年1月19日夜に始まりました。高知市神田に100キロ爆弾21個が投下されたのを皮切りに、高知県内全体で323回もの空襲がありました。
特にひ害が大きかったのが、7月4日午前2時

ごろ、B29(米軍の大型爆撃機)125機によって行われた「高知大空襲」でした。約1時間の間に約18万個の焼夷弾が落とされ、高知市中心部の大半が焼きつくされました。この日だけで400人以上が亡くなり、約100人が重傷を負いました。



7月4日未明、「ウー、ウー」と空襲警報のサイレンが鳴りひびき、たくさんのお米軍機が高知市上空に飛来。久川さんはお姉さんと階段をかけ下り、寺の境内にあった防空壕へにげこみました。まもなく焼夷弾が雨あられのように降ってきて、辺り一面が燃えさかりました(イラスト①)。

辺りが火の海に

久川さんは仁淀川町生まれ。1945年当時は親元をはなれ、市役所で働いていたお姉さんと、高知市の帯屋町近くの寺に部屋を借りて暮らしていました。
勉強好きで、現在の愛宕中学校の場所にあった女学校に通っていましたが、戦争の状況が悪化していたため十分な授業は受けられませんでした。その代わりに農作業に動員されたり、敵に見立てたわら人形をたおす練習をさせられたりしていました。

変わり果てた街

数時間後に外に出ると、前日まであった家は一つもなく、まだ燃えているところもありました。消火活動をしていたおじさんが「よう生きちよったのう」とだきかかえてくれ、鏡川の方へ行きました。水をためる入れ物に首をつっこんで動かない人、赤ちゃんを背負い、小さな子どもをだきかかえたまま死んでいる母親…。焼けただれた死体がそこらじゅうにありました(イラスト②)。久川さんたちは、と中でトラックに乗せてもらうなどして、仁淀川町の自宅に帰りました。

後日、寺の近所に住んでいた人から「寺の境内だけで162個の焼夷弾のつづが落ちていた。防空壕の上に一発でも落ちていたら死んでいたかもしれない」と聞いたそうです。

声の続く限り

戦後、久川さんは小学校の先生になりました。毎年7月には戦争体験を子どもたちに語り、学級だよりにも書きつづりました。退職後も小学校で語り部の活動を続け、その回数ももうすぐ100回を数えます。

「戦争ぐらい人殺しの地ではない。体験者が少なくなっているからこそ、声の続く限り平和の種まきをしたい」。より良い未来へ、願いをこめました。(松田さやか)

